

2010年に神戸で初めて観察されたキノコ4種

クリロイグチモドキ



アイゾメイグチ



バライロシメジ



チャナバ



2010年に神戸で初めて観察されたキノコ4種

幸徳伸也

2010年も定点観察会を中心として神戸でたくさんのキノコを採取することができました。例年どおり同定には苦戦しましたが、初めて同定できたキノコがいくつかありました。その中で、神戸産として初記録となるキノコは、ハルノウラベニタケ（高橋春樹氏仮称）、ニカワラッシタケ（高橋春樹氏仮称）、クロニセホウライタケ、クリイロイグチモドキ、アイゾメイグチ、オオクロニガイグチ、オオヒラタケ、バライロシメジ、モリノハダイロガサ、キヌハダタケモドキ、チャナバ、タマチョレイタケ属の一種（*Polyporus phyllostachydis*）、ニカワオシロイタケ属の一種（*Antrodiella fragrans*）、キシワタケなどがあります。

すべてのキノコを紹介したいところですが、印象深いキノコ4種を報告します

クリイロイグチモドキ

Gyroporus longicystidiatus Nagasawa & Hongo

2001年に長沢先生によって新種として発表されたキノコで、写真としては幼菌の会編著の「きのこ図鑑」に掲載されています。兵庫県では以前から報告があり、西播磨周辺ではよく採取されているようです。イグチの仲間、茶色系の一見地味なキノコですが、イグチなのに柄が中空～海綿状である特徴を見れば、割と見分けやすいキノコではないでしょうか。それなのに、神戸では報告がなく、まだ、誰も採取していないキノコで、「絶対あるに違いない」と思っていましたし、もしなかったら、採取されている西播磨周辺と環境的にどこが違うのか疑問に思っていました。そんなことで、気になるキノコの1つでした。

7月の定点観察会は143種ものキノコが採取されました。同定台に並べられたキノコをいつものように整理していると、途中で視線が止まりました。「あったのか！！」と本種を見つけたときは、衝撃的であったことをよく覚えています。採取したのは中野さんで、大龍寺コースで見つけたと言っていました。いっしょに行っていながら見過ごしたことと、今まで発見できなかったことを反省しないといけません。アカマツ・コナラの混生する修法ヶ原周辺では発見できていないので、どうやらこのキノコは、シイ・カシ林に発生する可能性が高いですね。

肉眼的な特徴は

- 茶色系のイグチで大きさは中型。
- クリイロイグチは傘・柄ともにが褐色～栗褐色であるが、本種は傘・柄ともにクリイロイグチよりも淡い。
- イグチの仲間は柄が中実のものが多いが、本種が属するクリイロイグチ属の柄は中実ではなく中空～海綿状。

アイゾメイグチ

Gyroporus cyanescens (Bull.) Quél. var. *violaceotinctus* Watling

神戸にあるなんてこれっぽっちも思っていませんでした。それだけに見つけたときは大変衝撃的でした。クリイロイグチ属のキノコで強い青変性があるという特徴は発見できれば容易に同定できます。それなのにあまり図鑑に載ってないため、かなり珍しいキノコだと思っていました。そのうえ、私の勝手な思い込みですが、信州など標高の高い所にあるというイメージがあり、そんな理由で、神戸ではまず見られないとばかり思っていました。いつか、見てみたいとも思っていたキノコの1つです。

見つけたのは7月26日、場所は大龍寺で、はじめは幼菌1つを見つけました。よくわからんキノコだと思いながら、雑に採取して、ちょっと傘を潰してみたところ、青変性があることにびっくりしました。その直後に、「アイゾメイグチ!!」と続けて「しまった!」と心の中で叫びました。潰してしまったため、写真に撮りようがなく、採取した証拠になりません。それで、周囲を搜索してなんとかきれいな幼菌を1個体採取することができました。その個体が掲載されている写真です。

日本産として報告されているクリイロイグチ属菌は、本種のほかに、先に掲載したクリイロイグチモドキや、ビロードクリイロイグチ、クリイロイグチがあります。ビロードクリイロイグチ、クリイロイグチも神戸で採取されているため、神戸ではクリイロイグチ属菌4種すべてを採取できるようになりました。

肉眼的な特徴は

- 傘は綿毛状で黄土色
- 強い青変性がある
- クリイロイグチ属のキノコで、クリイロイグチモドキと同様、柄は中空～海綿状。

バライロシメジ

Calocybe musashiense (Hongo) Hongo

実を言うと、初記録ではないキノコです。2007年の6月に一度採取しています。ただ、そのときに撮った写真が、報告できるような写真ではないので、今回、良い個体とその写真が撮れたのでここで初記録として報告したいと思います。標本も筆者の自宅に保管しています。

採取したのは北区山田町下谷上で、当会の会員の方がよく行かれるところです。今年採取した所と2007年に、採取した所とは少し離れています。採取環境は、2007年はモミ混じりの広葉樹樹下、今年はマツ混じりの広葉樹樹下でした。菌根性か腐生性かははっきりしませんが、発生環境としては落葉の堆積している所でしたので、腐生性のような感じがします。

本種は1965年に本郷先生によって新種として報告されたキノコですが、かなり前に発表されたにもかかわらず、未だに図鑑に載っているのを見たことがありません。原記載以外では青木実氏が日本きのこ図版で白黒の線画で報告しているのみです。珍しいキノコのようなのですが、一度見ればきっと忘れることはないと思います。それは、きれいな赤紫色の傘と、すべての部位が黒く変色するため、赤紫と黒のその色の対比が非常に印象的だからです。ただ、黒く変色するスピードはそれほど速くありません。はじめ見たときは、きれいな赤紫色のよくわからないキノコだと思いましたが、あとで、採取したカゴの中でヒダや柄の触った部位や傷ついた部位が黒く変色していることに気づき、それで本種だとわかりました。

きれいな赤紫色の傘はバラ色という表現がぴったりです。

肉眼的な特徴は

- 小型～中型。
- きれいな赤紫色の傘。
- すべての部位が黒変する

チャナバ

Cortinarius corrugatus Peck

キノコをはじめてまだまもない頃、キノコの知識も乏しかったのに、このキノコだけは、名前もわからなかったのにその特徴をよく覚えています。それっきり発見はしていなかったのですが、今年の10月に北区山田町上谷上で本種を発見することができました。一目見て、あのと看見たキノコだとわかりました。本種の特筆すべき特徴は、形態がショウゲンジに似ているという点にあります。ショウゲンジの特徴は柄の基部に外皮膜の名残が付着する点にあり、その特徴からショウゲンジ属という1つのグループになっています。本種もその特徴を持っていて、写真を見れば、柄の基部に外皮膜の名残が付着していることがわかります。また、匂いも特徴的で、とても不快な匂いがします。

チャナバとその学名は大分きのこ会が発行した「大分と九州のきのこ」掲載されています。本種は、ショウゲンジ属の新種として考えられていたようですが、すでにフウセンタケ属の既知種として外国で報告されているようです。

※最近の研究では、ショウゲンジ属はフウセンタケ属の異名として取り扱われているようです。

肉眼的な特徴は

- 柄に外被膜の名残が付着し、ショウゲンジに似ているが全体が赤茶色。
- 不快に匂いがする

今回報告する4種のキノコについての詳しい記録は、私が作成したホームページ「きのこのしるべ」に載せています。また、報告した4種以外の神戸産として初記録となるキノコについてもすべて記録として載せています。興味がある方はそちらをご覧ください。

きのこのしるべ <http://koubekinoko.chicappa.jp>

また、今回は掲載していないハルノウラベニタケ、ニカワラッシタケは両者ともに定点観察会で採取されたキノコです。そのキノコが、沖縄の高橋春樹さんによって新種として発表準備中のキノコであることがわかりました。詳しいことは高橋さんのホームページ「八重山諸島のきのこ」をご覧ください。

八重山諸島のきのこ <http://www7a.biglobe.ne.jp/~har-takah/>

また、来年も神戸を中心とした兵庫県のキノコ調査にまい進したいと思います。